

「ほしいも文庫」と「白土松吉文庫」の誕生

茨城大学非常勤講師 まっさき ちひろ
先崎 千尋

1. 干し芋の歴史を調べる

もう5年近く前のことだ。私はひたちなか市、東海村の干し芋業者などが作った有限責任事業組合（LLP）「ほしいも学校」のメンバーから、活動の一環として、干し芋の歴史をまとめるので、手伝って欲しいと頼まれた。本号に「干しいもの流通と販売戦略」を執筆している鬼澤宏幸さんもその有力なメンバーだ。私はそれまでひたちなか農協の専務だったので、仕事として干し芋のトップセールスもやってきた。しかし、干し芋の歴史となるとほとんど何も知らなかった。

二つ返事で引き受けたものの、最初は資料集めにてこずった。ひたちなか市は日本一の干し芋の産地だ。市立図書館に行けば、干し芋の資料は揃っているだろうと考えたが、ほとんどない。『勝田市史』や『那珂湊市史』を見ても、断片的にしか出ていない。茨城県立図書館や県立歴史館でも同様だ。干し芋産地を管轄する農業改良普及センターに行っても、資料を出してくれない。

さあ、困った。メンバーで川越市の「さつまいも資料館」の館長だった井上浩さんを訪ねた。早速、御前崎市教育委員会（当時）の沖雅弘さんを紹介してもらい、鬼澤さんと二人で御前崎市へ飛んだ。それまで、御前崎は灯台のあるところ、という程度の

知識しかなかった。

沖さんは、静岡での干し芋（イモ切干）の資料をたくさん集めておられ、その資料や『御前崎町史』、明治からの新聞記事などをいただいていた。帰りに寄った静岡県立中央図書館でも幾つかの資料を見つけることができ、その後磐田市立中央図書館ともメールでやりとりし、戦前の貴重な資料を送っていただいた。

そのうちに、県内でサツマイモや干し芋のことを研究している県の泉澤直さん、筑波の藏之内利和さん（いずれも本号に寄稿している）などに会い、少しずつ資料が集まってきた。

静岡から茨城に干し芋の製法が伝わったのは明治40年頃、というのがそれまでの通説だった。しかし、それ以前の明治28(1895)年に那珂郡前浜村（現ひたちなか市阿字ヶ浦）の照沼勘太郎が作り始めた、ということが分かった。

一歩進めようと、草創期に干し芋の普及にあたった人の家を訪ねたが、見つかったのは写真が3枚だけで、文書類はまったく見つからなかった。家を建てかえるときに燃やしてしまった、亡くなったときに処分してしまった、等々で、その都度残念な思いをしたのだった。

2. 何故静岡や茨城に特化したのか

私が干し芋の歴史を調べていて不思議に思ったのは、サツマイモはそれこそ全国各地でも栽培できる。そのイモを蒸すか煮て、皮をむいて切って干すだけ。干し芋の作り方はさわめて簡単なことだ。それなのに、現在では流通量のほとんどを茨城が占めている。それは何故なのか、ということだった。気候風土が干し芋生産に適していると言っても、冬に北風が吹くのは茨城だけではない。

農山漁村文化協会（農文協）が、大正から昭和初期の庶民の食生活を都道府県別にまとめた『日本の食生活全集』の索引にあたる『日本の食事事典 素材編』には、サツマイモに8頁を割いているし、生切り干しだけで77項目、ゆで切り干しで51項目もある。干し芋は全国各地で間食や子どものおやつとして利用されてきた。干し芋の製造は茨城の専売特許ではないということが分かる。

農林省でも、政策の一環としてサツマイモ（甘藷）の品種改良、作付け方法の改良・改善などを図り、増収を目標として掲げてきた。サツマイモの専門家は今でもたくさんいるし、本もたくさん出されている。

干し芋についても、静岡を中心に加工方法について研究を重ね、国県の試験場や農会を通して農家を指導してきた。1949年には『切り干しいもの作り方』という本も出ている。

茨城では、農家に適切な農村副業の懸賞募集を行い、県農会の機関誌『茨城農報』で農家の副業の特集を組み、冬の副業として干し芋（当時のかんそういも）の普及を図った。面白いことに茨城では、干し芋の

生産は明治から戦後に至るまで農家の副業として位置づけられてきた。戦前は干し芋だけでなく、園芸も養蚕も畜産もすべて農家の副業とされてきた。有名な結城紬ですら農家の副業として扱われてきた。

では干し芋の元祖の静岡ではどうだったか。私は、静岡で干し芋を副業として記述した例を見ていない。明治期から米麦の比重が低く、茶や園芸作物の商品化が進んでいたからなのだと考えている。

私が最初に抱いた疑問、大雑把に言って戦前は静岡、戦後は茨城が干し芋生産をリードしてきた。その訳は人にある、秀でた指導者、実践家がいたということだと考えている。静岡では今でも「いもじいさん」と呼ばれている大澤権右衛門、切り干し芋の創始者栗林庄蔵、蒸切り干しの製法を考案した大庭林蔵^{おおば}、稲垣甚七など。茨城では最初に製法を広めた湯浅藤七、宮崎利七、小池吉兵衛、村長として普及を図った大和田熊太郎、サツマイモの神様と呼ばれた農会の技師白土松吉^{しらとまつきち}などが挙げられる。両県とも一人だけの発明、発見ではないのだ。

のちに三重県に行き、「きんこ」について関係者に話を聞いたが、名前の由来はわかったものの、三重県でいつ、どこで、だれが作り始めたのか、ということにはわからなかった。また高知や愛媛の一部で「ひがしやま」が作られているが、その名の由来すら分からない。しかし、静岡でも茨城でも、年号と人の名前が特定できるのだ。茨城では、1776年頃に久慈郡諸沢村（現常陸大宮市）の中島藤右衛門が粉コンニャクの製法を考案した例があるが、このような農産加工品は稀である。

3. 白土松吉のこと

私が調べた干し芋の歴史は、LLPほしいも学校が2010年に発行した『ほしいも学校』に収録されている。この本は、グラフィックデザイナーの佐藤卓さんが企画編集した。基礎講座、パッケージ講座、干し芋講座、人体講座、環境講座、調理講座から成り、豊富な写真と図が入り、干し芋のあらゆることがわかる仕掛けになっている。B5判で433頁の大冊だ。私はその前に、自前で集めた資料をもとに、単独で『ほしいも百年百話』を地元の茨城新聞社から上梓した。

それからしばらくして、白土松吉（以下松吉）の孫にあたる方から風呂敷包に入った松吉の資料を借りることができた。私にとって松吉は歴史上の人。松吉を直接知る人は少なく、農業関係者ですらその名前を知らない。風呂敷包を見た瞬間、私に松吉の伝記を書けと命じている、と受け止めた。

しかし、風呂敷包の資料だけでは本は書けない。再び資料集めを始めた。東京霞ヶ関にある農水省農林水産政策研究所には戦前からの資料が保管されており、度々通った。そこで、浪速大学農業短期大学部が1955年にまとめた『日本に於ける甘藷の文

献目録』や農水省農業研究センターが1992年にまとめた『指宿市立図書館甘しょ文献目録』を見つけ、そこから古い資料を探し当てていった。1943年に日本甘藷馬鈴薯株式会社が出した『社報』には松吉だけでなく、戦前にサツマイモの研究、普及に功績があり、甘藷の三名人と言われた丸山方作、穴澤松五郎の論文が揃って載っている。これは他には見当たらず、指宿図書館にある（写真1）。

茨城県内では、県職員でありながら郷土史、農業史にめっぽう詳しい森田美比という先学がいた。森田の文のなかに、松吉が「土肥素」という肥料を販売目的とする岩間農場を作ったということが載っており、白土家にはその写真も残っている。しかし、森田の集めた原資料が見られないので、土肥素のことも岩間農場の場所も未だに解明されていない。

松吉は、当時反収が三百貫程度だった技術水準を千貫に上げることを目標にし、実際にその技術を確立した。さらに、干し芋の普及を奨め、松吉が亡くなる前年の1955年にととう茨城は静岡を抜き、全国一の生産県になった。戦時中は、アルコール燃料としてのサツマイモの増産にも貢献した。今では悪名高い「茨城一号」が普及したのもその頃のことである。さらに、1943年には加藤完治らが主導した首都圏へのサツマイモ苗の大増産に尽力した。

松吉はその他にも、農業用水である小場江堰の改修工事に私財を投じてあたり、農会の技師でよくもこれだけのことができた、と思っている。どこへ行くにもはだし、夏はイモ畑で寝たというくらいの研究熱心な人だった。



写真1 指宿図書館のサツマイモ関係資料

このような松吉の業績を1年がかりでまとめ、2012年5月に『白土松吉とその時代』を前著と同じ茨城新聞社から出すことができた。タイトルでわかるように、松吉の一生を縦糸とし、彼の活躍した時代背景を横糸とし、何故松吉がサツマイモの増産と干し芋に打ちこんだのかという全体像を浮き彫りにできたと考えている。

サツマイモに関する二冊の本を出して考えたのは、集めた資料をどうするか、ということだった。たかだか百年前、否五十年前のことも、生の資料はほとんどなくなってしまっている。私が集めた資料もわが家に置いておいたのでは、これまでと同じに散逸するか処分されてしまう。今後干し芋のことを研究する人は、私と同じように最初から資料集めをしなければならない。それなら公の施設に寄贈し、そこで誰でも見られるようにしよう。そう考えた。私の親友である村上達也東海村長にその話をしたところ、村立図書館で喜んで受け入れるとのことで、昨年6月に郷土資料コーナーの一角に「ほしいも文庫」を造ってもらった(写真2)。

また、松吉の活躍の場は那珂市だったので、執筆が終わった後、松吉関係の資料は那珂市歴史民俗資料館に寄贈した。どちらも誰でも閲覧できる(東海は開架、那珂は閉架)。寄贈後集めた資料も随時補充していく考えている。



写真2 東海村立図書館の「ほしいも文庫」

関連する文献

- 『ほしいも百年百話』(B 6 変形判291頁 茨城新聞社)
『サツマイモの神様 白土松吉とその時代』
(B 6 変形判240頁 茨城新聞社)
『ほしいも学校』(B 5 判433頁 L L P ほしいも学校)
先崎千尋「ほしいものルーツをたどる」1
～3(『いも類振興情報』第105～107号)
同「茨城にほしいも学校が開校」(『いも類振興情報』第108号)

連絡先

東海村立図書館 茨城県那珂郡東海村船場
768 電話 029-282-3435
那珂市歴史民俗資料館 茨城県那珂市戸崎
428-2 電話 029-297-0080
筆者 メール: tmassaki@sweet.ocn.ne.jp